

老人と鳩

小山清

青空文庫

老人は六十二になった。右半身が不自由だった。右腕が痛かった。でも、だんだん少しはよくなった。歩きだしてしばらくすると右の肺が痛かった。熟^じつとしていると、痛みは消えていった。三十になる頃、心臓が肥大していた。息切れがひどかった。六十になった時には、杖を引いていた。野桜の杖である。ちよつと手頃である。いつか、愛していた。野原の野桜である。

……ある日突然に倒れた。口がきけず、ものが言えなくなった。それつきり、五十三か四か、五か分らなくなっていた。肩が凝るということが、全然なくなつた。性慾がまた、全然なくなつた。始めは、お茶、水、小便、うんこ、の言葉しか言えなかった。食

うことは平気で食べた。女はあの日から、二年目に別れた。子供は持たなかった。

老人は家を引越した。そこは六畳と、四畳半の板の間と、小さい台所で、小さい庭があつた。野原の外れである。誰も音沙汰がなかった。

小鳥、魚の言葉が言えた。すぐ近くに大きな池があつて、「小鳥と魚は取つてはいけません。」と建札が書かれていた。

馬鹿は言えた。けれども、白痴^{はくち}、は言えなかった。また、自動車、は言えなかった。老人、これは言えた。正しく年老いた老人である。

春は三月の中旬に野桜が咲いた。野桜は見事であつた。大きな

池の傍に老人はベンチに腰を下した。ここは人々が来る場所ではなかった。池には葦が茂っていて、雀が鳴いていた。マガモが雌雄で遊んでいた。鮒が遊んでいた。ベンチに腰を下し、池を眺めてじっとしていたが、二時間から三時間はかかっていた。

夏は小さい庭の桃の実が生^なった。桃の実は一昨年は五拾個で去年は四拾個で、今年は六拾個であつた。甘^{うま}かつた。紫陽花は小^{あじさい}さいい茎を植えたのだが、四年に始めて花を開いた。大きな池では水すましが遊んでいた。蜻蛉、蝶が飛んでいた。蟬が鳴いていた。夜、池では蛙が鳴いていた。

秋は枯野原に可憐なコスモスが咲いた。小さい川が流れていた。ボール、牛乳の空瓶、運動靴、棒切れ、下駄が流れていた。小

い橋の上で疲れてしやがんでいることが多かった。よしきりばしと言っていた。なかなか名が分らなくて参った。そのうち、いつか、読めた。

冬は家の庭で日向ぼっこをしていた。窓硝子を開あけはな放していた。野原の一軒家で、誰も来なかった。空は青空であつた。陽は照っていた。庭の寝椅子に腰を下していた。じつとしていた。垣根越しに土や石や木が、目を少し閉じると、不思議な光景がまざまざ見られた。橋の池、線路、土蔵、樹々の梢、賑な街……。目を開けるとどうもないのだ。夜、寝ると、床をのべて、頭を少し下げて目を閉じて、ほんの僅か、祈るのだ。基督教徒の信者に似ていた。

すこしまえに、黒猫が住みついた。牡であつた。目は黄色であつた。ばかに大きかつた。もそもそしていた。朝に晩に魚を食べた。老人が日向ぼっこをしていると、黒猫は縁側で目を閉じていた。また、どこかへ行っていた。夜、床をのべると、黒猫は布団のはしで寝ている。

鳩がいた。野原の向うに小さい川が流れていて、そこに家があつた。家の傍に小さい小屋があつた。鳩の部屋であつた。老人は散歩に来ていたが、これまで、何も見えなかつたから。たまたま、散歩に来て、鳩の部屋を見つけた。中学生と小学生の二人の兄弟であつた。金網かなあみで造つた小さい小屋である。兄弟は釘で打ちつ

けていた。鳩は十羽であつた。牡、牝、五羽ずついた。白の鳩は一羽であつた。また、散歩に来て、鳩の部屋で、白の小旗が長い竿にかかつていた。小旗は風にハタハタ揺れていた。また、来た。屋根には四、五羽いたが、そこから空を翔とんでゆくのだ。流れてゆく川を渡つて、また、屋根に舞戻つた。

可愛い鳩。目を見ると、ほんとに可愛い。平和な鳩。ホオ、ホオと鳴く、低い鳴声。老人は鳩笛を思い出した。昔のような話だ。小学生の五、六年の頃、桜の枝を小刀で削つて、鳩笛を作つた。その頃のことを思い出した。図画の女教師のことを。老人はハトは言えた。けれどもハト笛はなかなか言えなかつた。兄弟は二、三人の仲間が来ていて、鳩の部屋にトタンで屋根を葺ふいた。老人

は鳩笛を作ってみようと思った。野桜のことを思い出した。野原にも、池のほとりにも、野桜は見える。野原の外れで、のこぎり鋸で枝を切った。S町の金物屋で小刀を買った。始めはさいしよから出できそ来損こないであつた。九日で小さい鳩笛を彫刻した。なんだか、へんてこりんであつた。でも、ハトであつた。黒猫がハトに爪で引搔いた。が、すぐ止めてしまった。池にあるマガモを作った。それから、犬、猫を作った。ハト、マガモ、犬、猫を机の上に並べた。老人はハトをあげようと思ったが、兄弟の顔を見ると、言葉が言えなかつた。

ある日、突然、見知らぬ女が、家に来た。四十七、八位の女で

あつた。「兄さん、わたしです。」と女は声をかけた。「ああ、お前は、」と老人は叫んだ。二人とも別々に、二十五年の歳月を送っていた。妹であつた。老人は言葉が言えなかつた。妹はそれを悟つた。^{さと}妹は少し近くのN町に住んでいた。毎月、一度であつたが、老人の許に出掛けた。妹は子供が二人いた。女の子が四年生で、男の子が二年生であつた。二人とも無邪氣であつた。老人の家で、子供たちはともに遊んでいた。「おじいちゃん。」と言つた声が、老人にはとても無邪氣であつた。作つた鳥、動物の彫刻を、二人はこもこも眺めた。老人はマガモを女の子に、犬を男の子に呉れてやつた。帰るとき、バスの停留所で、二人の子供は「おじいちゃん、さよなら。」と言つた。池のほとりで老人は妹

と子供たちと、ベンチに腰かけて弁当を食べた。妹と子供たちはどんぐり栗を拾った。老人はベンチに腰かけて三人の姿を眺めた。

S町の角に小さい映画館があつた。老人は殆んど映画を見なかったが、いちど見た。西洋物であつた。探偵映画であつた。犯人に殺される老婆が可哀そうであつた。老婆は唾で半身不随であつて、手押車に乗っていた。その老婆がむごい仕打で殺されるのだ。老人は老婆が可哀そうであつた。

「年老いた女が、古い家に住んでいた。

古い家の後ろに、コシヨウの木があつた。

コシヨウの木は燃えてしまった。

なぜなら……」

映画ニュースの概説の中に、この文句が書いてあった。家に帰って、老人は鉛筆であの文句を書いた。……女の子が歌う童謡が懐しい。老人は小人の国が懐しかった。

老人の家はQ町であつた。十分ほど行く通りに、貸家があつたが、やがて、コーヒー「ハト」の店が開店した。瀟洒な店であつた。老人は一寸驚いた。ハトのことを。老人は野桜の杖を引いて、いちど行つてみようと思つた。でも、駄目だ、駄目だと思つた。老人はついに決意した。朝の十時頃にこの店の扉をあけてみた。誰もいなかった。剥製のハトが二羽いた。おや、おやと思つた。すると、奥から娘が入つて来た。「お早^はよう、ございます。」と

言った。娘は十七、八の年頃であつた。コーヒーはうまかつた。パンもうまかつた。テレビが始まつた。スイスの村の景色が映つた。老人も娘も共に見ていた。そのうち十日ほど、老人はまた来た。朝の十時頃、誰もいなかった。また、奥から娘が来た。「お早よう、ございます。」「コーヒーとバターパンを下さい。」

「はい。」と娘は言つた。テレビを見た。水郷の潮来いたこが映つた。帰るとき、「マツチをどうぞ。」と娘は言つた。小さいマツチである。コーヒー、「ハト」。マツチの箱の表紙に、ハトが描いてあつた。老人は咄嗟に口が言えなかつた。黙つてマツチを貰つた。外で、「有難う。」と声をかければよかつたと老人は思った。七日に老人はまた来た。誰もいなかった。また、奥から娘が来た。

「いらつしやいませ。」と娘は言った。テレビが始まった。巴里のセエヌ河の岸が映った。老人と娘も共に見ていた。老人は「ちよつと。」と声をかけた。「はい。」と娘は老人の傍に行つた。老人の服のポケットから、ハトが飛び出した。「ハト、あげます。」と老人は言った。「まあ、ハト。」と娘は彫刻のハトを両手で眺めた。「有難うございます。」と娘は言った。帰るとき、「お家は、近くですか。」と娘は言った。老人は頷いた。

八日ほどで、老人はハトを二羽、作つた。机の上にまた畳の上に並べて、みんな眺めた。「御免下さい。」と誰か言った。「はい。」と老人は扉をあけた。娘であつた。「あつ。」と老人は声を呑み込んだ。「分らなくて、困りましたわ。」と娘は言った。

「おいで。」と老人は六畳の部屋に入った。「まあ、ハトが、：沢山いますこと。」と娘は言つて、ハトやマガモや犬や猫を指さした。老人は黙つて笑顔を浮べた。娘は「はい。」と言つて、ポケットから包みをとりだして、粘土細工のハトを呉れた。絵具で描いたハトである。老人は胸がいっぱいで、「ありがと」と言つた。

老人は机の引出をあけて一枚の半紙を取り出した。なにか書いてある。老人はそこを指さした。失語症。笑顔を浮べて。娘は、はつと顔色を変えた。老人は黙っていた。娘が言つた、「あなたは、独りぼっちですか。」「独りぼっちだ。」と老人は微笑を浮べて言つた。娘も微笑を浮べた。娘は小さい犬を手でおもちやに

していた。「ここへ、ちよくちよく、伺^{うかが}いますわ。……でも、駄目でしょう。」と娘は言つた。老人は言つた、「ちよくちよく。」
「有難う。」と娘は笑つた。縁側へ黒猫が歸つて来た。「あら猫がいるんですね。」と娘は黒猫の軀を抱いた。「長い尾^{おっぱ}ですね。とても可愛い猫ね。黒猫ですね、名前は。」「名前はないんだ。」
「そう。それじゃ、渾名はクロちゃんでもいいでしょう。クロちゃんという子供がいたことがあるんです。それでは、わたしはお暇^{いとま}します。朝十時頃にまた来て下さいね。さよなら。」娘は歸つて行つた。

新聞、ラジオ、本を売払つた。家には郵便もなかった。さばさばした。絵の本を見るのは、好きだった。壁には小さな複製を掛

けた。「コタンの袋小路」ユトリロ、一九一〇年（明治四十三年）。幼い頃の思い出だった。……老人は野桜の杖を引いて歩いた。

娘は十日ほどたつて、また来た。老人は一緒に池のほとりに行った。誰もいなかった。ベンチに腰を下した。娘は「あなたは発病後、幾年になりますか。」と言った。老人は「十年だか、十五年だか、わからない。」と言った。老人はさびしさが口許に込上げたのを我慢した。首くくりか自殺を図った後を思い出した。

「ハト、ハトがいるよ。この向うだよ。」と老人は言った。老人は娘を案内した。「ここだよ。」と老人は言った。小さい川が流れている。ハトの部屋。小旗が揺れている。二時頃で、中学生も小学生も二人の兄弟はまだ帰って来てない。「可愛いわ。とても

可愛いわ。」と娘は言った。「また、こんど、来て見よう。」と老人は言った。よしきり橋の上で、休んだ。

その後、老人は雀と豚を彫刻した。八日目で出来上ったが、風邪が^{こじ}拗れた。それから、布団で寝込んでしまった。黒猫の御飯を食べているのが、精一杯であつた。五日前に起き出した。老人はまた朝の十時頃、「ハト」へ来た。娘がいた。「こんにちは。」と二人は言った。老人の彫刻のハトがカウンターの上に置いてあつた。娘はそこへ目で合図をした。老人のポケットから豚が騒ぎ出した。

「まあ豚が、……とても面白いわ。」と娘は豚を掴み上げて、卓子の上に置いた。「鳥や動物の彫刻を、どんどんなさるといいわ

。「と娘は言った。テレビが始まった。漢拏山の朝露に濡れて、朝鮮が映った。カウンターの後に母親らしい女が現われた。そのとき、店へ男が一人と女が二人、どこどかとやって来た。老人は「また、来るよ。」と言って、店を出た。

（「小説中央公論」昭和三七年八月号）

青空文庫情報

底本：「日日の麵麴・風貌 小山清作品集」講談社文芸文庫、講談社

2005（平成17）年11月10日第1刷発行

底本の親本：「小山清全集」筑摩書房

1999（平成11）年11月10日増補新装版第1刷発行

初出：「小説中央公論 第三卷八号」中央公論社

1962（昭和37）年7月21日発行

入力：kompass

校正：酒井裕二

2019年3月29日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

老人と鳩

小山清

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>